

9. 佐用町と共に

地域との協働事業の継続に向けて

兵庫県立佐用高等学校長 大塚 幹典

I はじめに

本校は兵庫県南西部の佐用郡佐用町に位置し、明治42年（1909年）に佐用郡立農蚕学校として開校、昭和23年に兵庫県立佐用高等学校と校名変更、令和6年に創立115年を迎えた男女共学の高等学校である。本校は1学年につき農業科学科1クラス家政科1クラス普通科3クラスの計5クラスの全日制高等学校で、男子211名、女子190名の合計401名が在籍している。校風「明るくいきいき」、校訓「自主独立・敬愛協力・創造工夫」の精神に基づき、「まちを支える人づくり」をスローガンに、地域連携・貢献を中心に魅力ある学校づくりに励んでいる。

令和2年度から3年間、家政科は文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」の研究指定を受け、『食』を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成～佐用風土（Sayo Food）を活用したモデルプランの構築～をテーマに、これからの時代に対応した新しいカリキュラムの開発に取り組むとともに、生活産業分野で活躍するスペシャリストの養成と地域に根差した社会に貢献できる人材の育成に取り組んだ。

新型コロナウイルスの影響により制約が多い状況であったが、令和2～4年度、3年間の取組が内外から高い評価を受け、協働先である佐用町より取組の継続および佐用高校全体との協働事業の実施要望があった。佐用町からの支援のもと、「地域と高校の協働による輝く人づくり支援事業」として家政科だけでなく普通科・農業科学科でも取り組んでいる。

前半は家政科の指定3年間及び令和5年度の

取組、後半に令和5年度の普通科・農業科学科の取組を紹介する。

II 文科省指定事業の概要

佐用町課題解決3方針

- 佐用の特産品を活用（商品開発・マーケティング）
- 佐用で暮らす人を守る（健康寿命延伸）
- 佐用の水害から学ぶ（安全安心なまちづくり）



佐用高校課題解決3施策

- 「佐用風土（Sayo Food）」商品開発
- 「高校生訪問サービス」実施
- 「保存食・非常食」開発

佐用町は、老年人口率40%（全国平均の1.5倍）という現状や、平成21年台風9号の豪雨被害の教訓を踏まえ、地域を活性化し、安全・安心で充実した暮らしができる町に進化させることを課題としている。本事業では地域特産品や伝統料理、健康食といった「食」を中心に町と連携している「佐用風土（Sayo Food）」に関する取組を発展充実させ、「ローコスト・ハイクオリティ社会」の実現に貢献するとともに、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランを構築した。その施策の三本柱として、一つ目が「佐用の特産品を活用（特産品を使用した商品開発）」、二つ目が「佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）」、三つ目が「佐用の水害から学ぶ（安全・安心なまちづくり）」を設定した。そして、家庭科で身につけた専門的な知識や技術を基に、生活の質の向上と社会の発展を担うプロフェッ

ショナル人材として、地域社会で活躍できる人材の育成を目標に掲げた。本校のスクール・ミッションやスクール・ポリシーにおいてもこのことを掲げている。このスクール・ミッションを遂行する上で、本事業を活用してきた。

◇スクール・ミッション

「自主独立 敬愛協力 創造工夫」の理念のもと、自立して未来に挑戦する態度をもち、志を抱いて地域社会や国際社会に貢献できる力を備え、グローバルな視野とローカルな視点をもったグローカルの理念を実現できる人材を育成する。

◇スクール・ポリシー

(家政科グラデュエーション・ポリシー) より

- ・専門的な知識と技術を習得し、生活産業分野の高い資質をもった生徒を育成する。
- ・生活の質の向上と社会の発展を担うプロフェッショナル人材を育成する。
- ・将来の進路実現に向けて努力し、自らの生き方をデザインする力を持った生徒を育成する。

学年	付けた い力	佐用の特産品を活用 (佐用もち大豆・ 夢森トマト)	佐用で暮らす人を守る (高齢者食生活調査・ 食生活レシピ開発)	佐用の水害から学ぶ (災害時保存食開発・ 避難時支援者育成)	開発目標
3年	探究 発展力	フードスペシャリスト (高校生カフェ・ レシピ本発行)	ヒューマンサービス (高校生訪問サービス)	ヒューマンサービス (減災対策の提言)	●最終成果発表 (食品、レシピ本等) ●検証と成果普及 方法の確立
2年	探究 実践力	課題研究 (「佐用風土 (Sayo Food)」を使った商品 開発・食育活動)	ヒューマンサービス (地域課題改善策の 提言)	フードデザイン (保存食・非常食開発)	●校内外での中間 発表等の実施 ●フィールドワー ク
1年	探究 基礎力	フードデザイン (基礎学習・食育活動)	生活産業基礎 (地域実態調査)	総合的な探究の時間 (防災学習・佐用学)	●カリキュラムや 評価等研究・開発 ●PDCAサイクル の確立

本事業の実施にあたり、佐用町と協議を重ねテーマの設定を行った。佐用町の抱える様々な課題や取組と、佐用高校家政科が実施しているカリキュラムに照らし合わせて、「食」を中心にカリキュラム編成を行った。三本柱ごとに積み上げる力を、1年生で「探究基礎力」、2年生で「探究実践力」、3年生で「探究発展力」とし、具体的な科目名を設定した。地域課題解決を通して、「コミュニケーション力」や「課題発見・解決力」など、生徒に身に付けさせたい力と地域を支えるプロフェッショナル人材として必要な能力の習得を第一に考え、科目内での実施内容

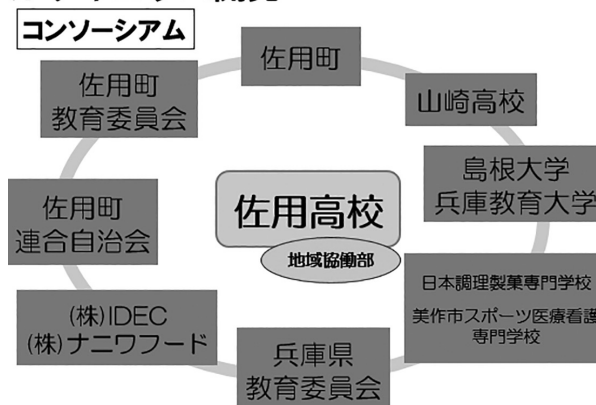
を決定した。

まず、佐用の特産品を使った商品開発では、開発した商品を使って高校生カフェや高校生レストランを実施して、レシピ本を作成し、地域に還元することを目標とした。健康寿命の延伸では、最終的に実際に地域に出てフィールドワークを行いながら学ぶことを目標とした。災害に強い町づくりでは、保存食や非常食などをキーワードに地域に対して防災や減災についての情報提供を行うことや、合同防災訓練の企画運営で意識を高めることを目標にした。

また、事業の実施にあたりコンソーシアムを結成した。三本柱をもとに、外部の方が実際に生徒と関わりながら協働することや生徒に身に付けさせたい力が付く仕組みづくりを目指して、企業や専門学校や大学などの専門機関にお願いした。校内体制として、これらコンソーシアムとの結びつきを支える部署である、地域協働部を設置した。

Ⅲ 文科省指定事業の内容

カリキュラム開発



1 特産品による商品開発

＜佐用風土 (Sayo Food) を使って商品開発 地域資源を活用し、地域活性化に貢献＞
(1)商品開発 (2)地産地消啓発活動 (3)食育活動

(1) 商品開発

佐用町の特産品を使った商品開発を行うことを通して、地域の活性化に向けて主体的に取り

組む態度を養い、地元の魅力を大切にしたいというふるさと意識を育む。

課題研究（家政科2年食物コース選択者）

「佐用町の特産品×災害備蓄食」をテーマに商品開発に取り組んだ。外部から佐用町役場の職員、地域の栄養士、夢茜トマトやもち大豆の生産者、食品会社の方々に毎月来校していただき、会議を開いた。会議での意見を参考に試作・試食を繰り返し、商品開発を行った。



商品開発企画会議中



販売の様子

R4「夢茜トマトスープ」

「佐用もち大豆のSOY STICK」

R5「ミートソース」「栗ペースト」



R4 開発商品



R5 ミートソース

R4の商品は夢茜トマト、佐用もち大豆を使用するとともに、その他にもキャベツ、にんじんなどの野菜を使用し、災害時でも野菜を摂取できることを考え商品を開発した。さらにラベルも生徒がデザインし、トマトスープの色が際立つように白のラベルを採用、冷めたままでも美味しい商品が完成した。

○商品開発についての生徒の感想

「商品開発をする前は不安なことがたくさんあったが、協働先の方々にほめていただき、お客様には喜んでいただける商品ができたので、とても嬉しかったし、達成感があった。」

（2）地産地消啓発活動

【高校生カフェ】

佐用町の特産品を使ったお弁当と焼き菓子の献立を考案し提供することを通して、地域の課

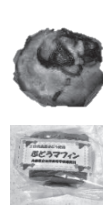
題解決に向けて自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む力を養う。

課題研究（家政科3年食物コース選択者）

9月より佐用町の特産品を使ったお弁当と焼き菓子の献立の考案、試作・試食を始めた。地産地消の観点から佐用産の食材を使用した献立を考え、何度も試作を行った。11月には協働先の方々に対して、試食会を実施した。いただいた意見を参考に献立を改善し、高校生カフェで提供した。



接客中



オリジナル弁当と焼き菓子



R5はミニファッションショーも開催

○生徒の感想

「瓜生原でのカフェのために自分たちで一からメニューを考え、何度も試食をして味の確認などをした。これまでに体験することがなくいろいろ大変だったが、自分たちでやることで達成感を得ることができ、とてもやりがいを感じることができた。」

【高校生レストラン】

生徒が開発した商品や地元特産品を使用したメニューを提供し、地域住民と関わることを通して、コミュニケーション能力を向上させるとともに、課題発見・解決力やふるさと意識を身につけ、主体的・対話的な学びにつなげる。

フーズスペシャリスト（家政科3年）

令和4年度、レストランは合計3回開催し、35名が3グループに分かれて準備に取り組み、施設宿泊者に開発商品を使用したピザ作り体験、

商品のプレゼンテーションを行った。

令和4年度10/8（土） 11/26（土） 12/18（日）

令和5年度は2回実施 10/9（祝） 11/26（日）

実施場所 glaminka SAYO（古民家風宿泊施設）

実施内容 令和5年度 第1・2回

- ・宿泊者に開発商品の「夢茜トマトソース」を使用したピザ作り体験

時程	生徒の動き・役割	備考
8:40-	生徒集合、準備、荷物積み込み（食材切る、生地分配、プレゼンテーション練習）	
9:30-	学校出発	佐用町役場から配車
10:00-	会場準備	
10:30-	チェックアウトされたお客様を案内 順次ピザ作り、試食 ①生地作り ②生地発酵 ③具材選び、トッピング ④窯で焼く ⑤試食	発酵時間にプレゼンテーション、交流
12:30-	会場後片付け、グラミンカの方にプレゼン	
13:00-	グラミンカ出発	
13:30-	片付け、解散	



親子でピザをピザ釜へ

○生徒の感想

「お客様から話しかけてくださったり、夢茜

トマトのプレゼンをさせていただいた際に、うなずきながら聞いてくださったり、たくさんの質問をしていただいて、とても嬉しく、心が温かくなった。」

○お客様の感想

「自分たちで商品開発をしているのもすごいですが、過去の水害を経験して災害食に着目した商品開発をされているのは素晴らしいと思いました。」

（3）食育活動

これまでの学習を生かし、地域での食育活動を企画・実施することで、地域に学びを還元する。また、人に伝えことの重要性を生徒に実感させ、情報発信力やプレゼンテーション能力の向上を図る。

フードデザイン（家政科1年）

園児と直接ふれあうことにより、幼児に対する理解を深めるとともに、食育活動につなげることを目的として取り組んだ。園児とのクッキーづくりやレクリエーションなど、1年生にとっては初めての地域交流となった。



子どもの発達と保育（家政科3年）

遊びを通して子どもたちに「食の大切さを知ってもらう」ということを目的としてふれあい育児体験を実施した。食育おもちゃを事前に製作して地元保育園に訪問し、交流会を行った。コロナ禍に配慮し、訪問人数を半分に分けて2回実施した。

2 健康寿命の延伸

＜充実した暮らしができるまちづくり
健康寿命の延伸に向けた提言・実践＞

- (1) 福祉知識及び技術の習得
- (2) 給食サービス
- (3) 高校生訪問サービス

(1) 福祉知識及び技術の習得

上級学校や地域からの講義を通してより専門的な知識を習得し、生徒の深い学びにつなげる。また、「給食サービス」や「高校生訪問サービス」の実践にあたって、生徒の主体性を促す。

【佐用町の高齢者について学ぶ】

ヒューマンサービス（家政科2年）

地域に寄り添った活動に取り組めるようになることを目的として、佐用町役場の高年介護課と健康福祉課から講師を招き、佐用町の高齢者の現状について講義を実施した。また、地域包括支援センターの役割やケアマネージャーや保健師などの専門職の仕事内容を聞くことで、職業に関する考えも深めることができた。

【高齢者との接し方について学ぶ】

ヒューマンサービスⅡ（家政科3年）

佐用町社会福祉協議会から講師を招き、高齢者との関わり方について講義を実施した。専門的な知識を得た上で「高校生訪問サービス」を実施することを目的とした。高齢者との接し方を改めて学ぶことで、活動のモチベーションも向上させることができた。

【校外学習Ⅰ】

フードデザイン（家政科2年）

日本調理製菓専門学校との協働による大量調理の校外学習を実施。給食サービスに向けて大量調理の技術を習得



することを目的に行った。献立ごとに本格的な調理器具も使用して調理を行い、約40食のお弁当を製作。高齢者に好まれる献立や衛生管理についても講義をしていただいた。

【校外学習Ⅱ】

生活と福祉（家政科2年）

協働先である美作市スポーツ医療看護専門学校に訪問し講習を受講した。介護福祉の専門的な知識と実技について学ぶとともに、福祉分野についての知見を広げ地域の求める人材育成を目指す。



校内設備見学



車いす体験

生活と福祉（家政科2年）

佐用町の高年介護課に依頼し、認知症サポーター養成講座を開催していただいた。認知症に対する知識を習得し、認知サポーターの資格を得た。



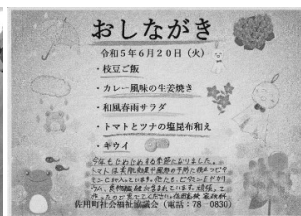
(2) 給食サービス

佐用町社会福祉協議会と協働で給食サービスに携わることで、生徒が地域の方々と共に高齢者世帯への支援に携わった。

また、上級学校で大量調理について学んだことを活かして、献立作成から調理までの実践活動を行うことで調理技術の向上を目指す。



調理中

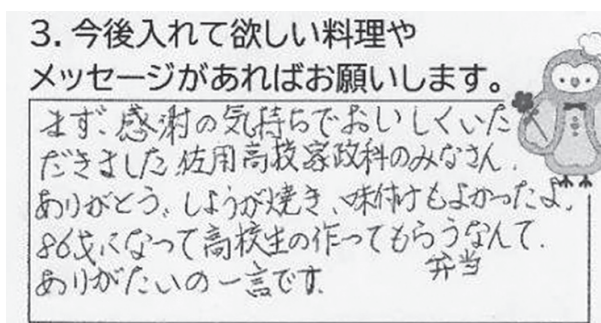


お品書き

ヒューマンサービス（家政科2年）

返信があったはがきは、担当生徒に感想を伝えたり、次回の献立の参考にしたりするために

当該クラスで教室掲示を行った。



○生徒の感想

「実際にしてみると大変でしたが、お弁当の盛り付けを終えて、おしながきとはがきを添えた時は 大きな達成感でいっぱいでした。」

(3) 高校生訪問サービス

生徒が直接高齢者宅を訪問し地域住民と関わることで、コミュニケーション能力を向上させ、課題発見・解決力やふるさと意識を身につける。また、生活改善に向けての提言を行うことで、地域住民の健康寿命の延伸に貢献する。さらに、PDCAサイクルを確立し、生徒の主体的・対話的な学びにつなげる。

ヒューマンサービスⅡ (家政科3年)

佐用町内の18世帯の高齢者宅に訪問を依頼した。生徒を2人1組、合計18班に分けて同じ世帯に同じ生徒が訪問する体制をとった。生徒は徒歩組と車の送迎組に分かれて訪問先へ行き、教員は巡回を行う。同じ世帯に訪問することで昨年度よりもさらに交流を深め、生徒に進行を任せることで主体性とコミュニケーション能力の向上を図る。



コミュニケーションカード



脳トレ

○生徒の感想

「高校生訪問サービスをするようになって、私たちの意識が変わったと思います。やらされてやるのではなく、自分たちが積極的に活動に

取り組んでいるなと思いました。」

3 災害に強い町づくり

＜「減災への対応力のある」まちづくりの推進
地域の方と一緒に災害について考える＞

- (1) 災害・防災学習 (2) 減災action
- (3) 佐用合同防災訓練 ～KIZUNA大作戦～

(1) 災害・防災学習

災害や防災の知識や技術を習得することで、実践活動において生徒の主体性を促す。また、上級学校や地域の方との交流を通じて、より専門的な知識を習得し生徒の深い学びにつなげる。

【佐用町について知る「佐用学」】

総合的な探究の時間 (家政科1年)

佐用町役場企画防災課から講師を招き、新入生が佐用町の取組や現状について基礎知識を得るために講義



を実施した。平成21年に佐用町で発生した水害についても教えていただき、生徒の防災意識とふるさと意識の向上を目的とした。

【災害について学ぶ】

課題研究(福祉)(家政科2年福祉コース選択者)

ドローン減災士協会から講師を招き、佐用合同防災訓練の企画者である課題研究(福祉)の生徒を対象に、改めて佐用町の水害について考え、学びを深めるため、当時の写真や映像、復興までの道のりについて講義を実施した。

【校外学習】

フードデザイン (家政科2年)

日本調理製菓専門学校との協働による災害食・保存食研修会を実施した。災害時に活用できる知識と保存食の技術について学ぶだけではなく、災害に関する事業と横断的なつながりを持たせることを目的とし、缶詰や真空調理の商品開発につなげる。

【災害食学習】

フードデザイン（家政科1年）

佐用町の栄養士、いずみ会の皆様からの災害食学習であるバッククッキング講習会で防災を通じた食育活動を実施した。知識・技術の習得だけでなく、地域の方との交流も目的とした。



【佐用町まち歩き】

総合的な探究の時間（家政科1年）

ドローン減災士協会の方をお招きし、二度にわたって佐用町の水害や防災の取組について講義をしていただいた。1回目では水害が起きた時の映像や写真をもとに講義をしていただき、2回目では佐用町の町歩きを実施した。実際に被害を受けた町の中を歩き、被災された方から当時の様子を聞くことができた。佐用町の水害について調べ学習を行っている1年生にとっては、学びを深める機会となった。

○生徒の感想

「特別講義や町歩きの後の自分は水害についてもっと知りたいと思うようになった。水害に対して気持ちがすごく強くなり、もっと佐用町のために何かしたいと思った。」

（2）減災action

学校全体で防災学習に取り組み、防災意識高め、他学科・他教科との連携などカリキュラム・マネジメント体制の構築を行う。「減災action」を防災訓練前後に設定し、その期間、各教科で防災・減災・災害などに関する内容を取り入れた授業を1時間程度行う。以下の計画を立て実施した。実施した教科は以下の通りである。

教科	科目	学年	内容
家庭	家庭基礎	1年	災害時の備え
農業	農業と環境	1年	農業と災害の関係
保体	保健	1年	応急手当
美術	美術	2年	防災ピクトグラム

英語	英語表現	2年	防災対策
社会	地理A	3年	ハザードマップ

（3）佐用合同防災訓練～KIZUNA大作戦～

佐用町との協働事業として防災訓練を拡大させて実施することで、地域とともに災害について学び地域全体の防災意識の向上を目指すことで、「災害に強い町づくり」につなげる。また、生徒自らが計画から進行を行うことで、企画運営力を身につけ、地域住民と関わることでコミュニケーション能力を向上させ、主体的・対話的な学びにつなげる。

課題研究(福祉)(家政科2年福祉コース選択者)

課題研究（福祉）選択者が合同防災訓練の企画中心者となり、実施計画を立てた。外部講師の講習会を参考に、グループに分かれて、地域と防災訓練をすることでどんな効果があるか、防災訓練でどんなことに取り組みたいかなどの意見交換を行った。

【企画会議】

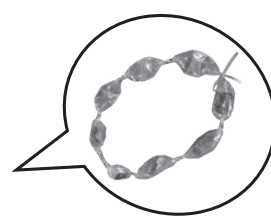
防災訓練の準備を進めるにあたって、佐用町役場やドローン減災士協会にも参加していただき、企画会議を開催した。様々な視点からのアドバイスを多くいただくことで、生徒自身の防災訓練に対する視野を広げることを目的とした。

【佐用小学校事前交流】

佐用小学校1年生（39名）の児童を対象とし、防災出前授業と備蓄食ワークショップを行った。生徒自らが内容を企画し、計画を立てて準備に取り組んだ。また、合同防災訓練に向けた事前交流も目的とし、ワークショップで作ったキャンディーレイは避難時に身に着けてもらうことにした。



キャンディーレイ制作中



完成品

【佐用合同防災訓練～KIZUNA大作戦～】

時間	内容	場所
8:55～ 9:40	L H R ※ 2 年家政科、普通科一部生徒は準備にあたる	各教室
9:50～ 9:55	担任から説明	各教室
9:55～10:00	校内放送で緊急地震速報を流し、シェイクアウト訓練を行う	グラウンド
10:00～10:10	スピーカードローンで上空から誘導し、グラウンドに出る	
10:10～10:15	講評（消防署職員）	
10:15～10:20	総括（校長）	
10:20～10:30	ドローンを用いた物資輸送のデモンストレーションの見学	
10:30～10:35	家政科生徒によるまとめと体験学習の説明	
10:45～12:05	各学年に分かれて体験学習を行う	各実施場所
12:15～12:25	アンケートなどの記入	各教室



避難誘導放送



ダンボールベッド体験



高齢者とシェイクアウト訓練



簡易担架作り

Ⅳ カリキュラム開発と効果

「佐用高校指導メソッド」

カリキュラム開発を行う中で、成果に結びついたポイントがいくつかある。一つ目は3年間の事業の流れを明確にし、カリキュラムの内容を決めやすくしたことである。経年で学習を深めていく流れを確立したため、授業や内容が違っていても、一貫した体制を取ることができた。

次に、生徒が主体的に学びに向かうために私たち教員の姿勢を確立した。それは生徒のPDCAに合わせて、私たち教員は口出し手出しをするのではなく、それぞれのセクションにおいてそばでサポートをする姿勢を取ったことである。P「計画の段階」では「共に考え待つ」生徒の自主的な活動を待つ姿勢。D「実行の段階」では「共に行動し見守る」教員は側について見守る姿勢。C「評価の段階」では「共に振り返り褒める」良いところを見つけて褒める姿勢。A「改善の段階」では「共に改め期待する」生徒の挑戦を信じて期待する姿勢。これには教員は、少々我慢も強いられたが、生徒が自ら軌道修正しながら主体的に事業を実施する仕組みができ、今回の成果につなげることができたと思う。

カリキュラム開発

生徒が主体的な学びに向かうための佐用高校指導メソッド

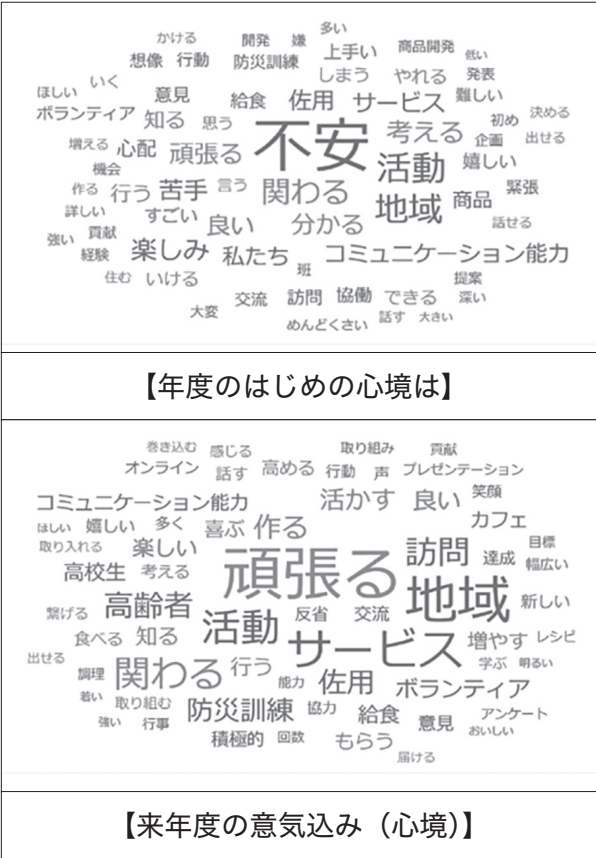
生徒の活動	教員の指導
P (計画)	「共に考え待つ」 生徒の自主的な活動を待つ姿勢
D (実行)	「共に行動し見守る」 教員は側について見守る姿勢
C (評価)	「共に振り返り褒める」 良いところを見つけ褒める姿勢
A (改善)	「共に改め期待する」 生徒の挑戦を信じて期待する姿勢

V 成果と課題

1 生徒の感想

令和3年度の活動に対する生徒の感想を「AIテキストマイニング」によりデータ分析したところ、事前の心境から、事後の心境に大きな変

化が見られ、多くの生徒が肯定的な意見や次年度への意気込みを示す言語を多数記述していることがわかる。



出典：User Local、AIテキストマイニング、
<https://textmining.userlocal.jp/>
 (2022.3.10)

2 カリキュラム開発専門家からの評価 (令和4年度：最終年度)

- ・来年以降に研究をどう活かし、自走するかが大切である。「生徒」「先生」「プログラム」の3つが自走しなくてはならない。家庭科の目標は家庭科で学んだことを自分の生活や社会に活かすことが大切である。自分のこととして主体となり、学びを活かして主体的に考えて動ける人間になっていくためのプログラムがとても大切である。3年間で生徒が主体的に動けるようになっていっていると思う。発展させながら生徒が自分で生き方を選んで自走できる人になって欲しい。
- ・カリキュラムが完成年度であった。当初に考えられたカリキュラムを着実に実施して生徒

の成果が出た。昨年度までの様々な評価を総括的に評価して全体的なカリキュラムの見直しを行う必要がある。持続可能にするために、やりすぎている所や足りない所を見直すべき。全体のカリキュラムの見直しを最後にすると良い。

- ・新規事業を来年度以降も行うことは素晴らしい。可能であれば各学科の専門性を高める内容だと良い。最終で良いが3つの学科が混じり合う部分の科目があると良い。「STEAM教育」はそれぞれの特性を活かして色々な人と協力する教育である。家政科、農業科学科、普通科の特技を活かして佐用を良くすることを考えるプロジェクトだと面白い。

V 令和5年度 地域と高校の協働による輝く人づくり支援事業 (家政科の取組は重複しますので省略)

【普通科】

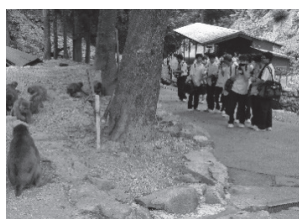
- 1 地域を理解し活性化を図る
 - 佐用町を知る
 - 佐用を学び、課題を発見し、解決策を考え提案する取組
 - 4月21日 スピカホール、西はりま天文台公園にてオリエンテーション
 - 6月10日 南光ひまわり栽培ボランティア



- 7月20日～21日 ひまわり祭りボランティア

2 佐用町地域理解

- 7月18日 佐用町地域理解バスツアー
- ・宿場町平福、グラミンカ佐用
- ・南光自然観察村、るり寺モンキーパーク
- ・乙大木谷棚田、笹が丘公園



モンキーパーク訪問



古民家ホテル訪問

3 佐用町との課題共有—まちの課題を考える



町役場職員による講義



グループワーク

4 課題解決に向けての探究活動

令和6年7月に地域課第を検討し、提案発表会（予定）での発表に向けて取り組む。

【農業科学科】

1 公共施設・観光資源の環境整備

- ・西はりま天文台公園（6～12月 フジバカマの植栽・管理）



アサギマダラの飛来



フジバカマの管理

- ・南光自然観察村（11月 草刈り作業）



- ・西新宿花しょうぶ園（6月 草刈り作業）
- ・乙大木谷棚田（9月～10月 草刈り作業）
- ・利神城御殿屋敷跡（10月 草刈り作業）

2 地域の伝統文化継承活動

- ・皆田和紙原材料（楮）の栽培供給（5月～12月）

- ・皆田和紙の活用と技術継承（紙すき、染色、行灯・うちわ制作体験）（6月、11月）



楮（こうぞ）の栽培



収量 R4-400kg



紙すき



うちわ製作

3 地域活性化

- ・グラミンカ佐用との活性化連携事業
ビジネスプラン（グラミンカ 大西氏による起業と接遇に関する講義）（10月）
- ・栽培収穫体験（10月 農場d e 夕食 食材の収穫）（1月、2月）



宿泊客との収穫体験



野菜レシピの紹介

- ・南光ひまわり栽培支援（6月）

4 人材育成

- ・佐用まなび舎農園研修実習
5/24 3年生 1/30 2年生
- ・5月24日 畜産施設見学研修（但馬牧場公園、但馬牛資料館見学）

5 幼稚園・保育園・小学校との体験交流授業（アグリスクール）

- ・サツマイモ栽培（幼稚園・保育園・佐用小1年生）（5月、11月）
- ・ダイズ栽培（佐用小3年生）（6月～1月）
- ・イネ栽培（佐用小5年生）（5月、6月、10月）



田植え



稲刈り

・牛の飼育体験（５月、９月）



高校生が先生



牛のブラッシング

【部活動：ＪＲＣ部（ボランティア活動）】

ＪＲＣ部の生徒が、地域でのボランティア活動に参加・高校生カフェ 12/17 2/3

赤字ローカル線であるＪＲ姫新線の利用促進について、県と町が行う補助事業の取組の一環として参加。当日は家政科の生徒たちが作ったシフォンケーキとドリンクを提供した。姫新線を利用した方には、生徒がデザインした駅名入りキーホルダーをプレゼントした。



接客中



４種類のキーホルダー

【コンソーシアム委員会・成果発表会】

○第１回コンソーシアム委員会 ６月９日 本校
令和５年度の事業計画について、コンソーシアム委員から意見・助言をいただいた

○成果発表会及び第２回コンソーシアム委員会
12月18日 さよう文化情報センター
令和５年度成果発表会及び第２回コンソーシアム委員会

コンソーシアム委員から今年度事業の評価と、次年度への助言をいただいた。

Ⅵ おわりに

３年間本事業を行うことで生徒たちには課題発見解決能力やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力など様々な力の向上を実感している。また、各種検定の合格やコンテストでの入賞など、具体的な成果も多く見られた。令和４年度は研究最終年度ということで、たくさんの成果発表の場も提供いただいた。大きな発表会として青森県で行われた「全国産業教育フェア2022」では代表生徒が発表を行い、展示やワークショップを通じて佐用町や佐用高校での活動を全国に向けて十分にＰＲすることができた。

文部科学省からの指定は令和４年度で終了したが、令和５年度佐用町の支援をいただき引き続き「地域と高校の協働による輝く人づくり支援事業」として地域との協働による教育活動を継続することができた。

家政科は３年間の成果をもとに、担当教員が変わっても自走できるカリキュラムの見直しの１年であった。普通科は総合的な探究の時間での取組が基本であり、いかにカリキュラムを開発し、この事業に落とし込んでいくか試行錯誤の１年であった。農業科学科は家政科同様専門学科であり、地域との協働による取組は以前より行っているが、家政科のメソッドを参考に、組織的に取り組むカリキュラムの開発が必要である。取組をいかに広報していくかも課題である。

コンソーシアムの方々の意見も参考にしながら、佐用町と共に歩み続ける佐用高校として今後も協働事業を継続し、魅力ある学校づくりに邁進したい。